

◆ 高校生の底力 ◆

これまで何度も触れてきたことだが、特に3年生にとっては本来あるべきものがないという現実  
に、どう落とすところ（そんなものはないと言われてしまいそうだが）を見いだすか、何とも表現し  
ようもないそんな鬱屈とした思いを想像すると本当に胸が痛む。夏の甲子園、インターハイ、吹奏  
楽コンクール…それに繋がる予選大会が軒並み中止となってしまった。

そんな中、5月18日のメッセージで触れた「文化部のインターハイ」といわれる今年の全国高  
等学校総合文化祭高知大会が、7月31日に「[web上での開催](#)」という形で始まった。どのよ  
うなものになるのだろうかと気にしていたのだけれど、どうやら杞憂に終わりそうだ。各専門部での力作  
が披露されている。

6年前の2014年の7月27日、本県で「いばらき総文2014」が開催された。

県教育委員会文化課で準備が始められたのが、東日本大震災直後の2011年。被災文化  
財への対応に追われていた当時の私の横では、総文への対応が着々と進められていた。

翌2012年、組織は正式に発足し、こんな縁もあってか、私は現場から側面支援をさせても  
らえる立場となった。2013年の長崎総文を視察させてもらった際の高校生の熱さは、当時の長  
崎の暑さとともによく覚えている。

そして迎えた2014年。「いばらき総文」総合開会式で披露された「構成劇」は、平和へのメッ  
セージを強く感じさせると同時に、高校生の底力を見せつけた。参加した彼らの成長は、大変  
驚くべきものであった（後日、この構成劇は茨城県高等学校文化連盟創立30周年記念構成  
劇「[真綿のような白雲がみえる](#)」に引き継がれることになる）。

さて、このコロナ禍の状況下発せられた「アートは人類の生命維持装置」とするモニカ・グリユッ  
ター独文化相の言葉。「web上での開催」であるからこそ、「こうち総文」での各専門部での取組  
は、「芸術文化」のなお一層の重みを感じさせるものとなるのではないだろうか。

この「こうち総文」に、本校からも一枚の写真が出品された（詳細は[こちら](#)）。

タイトルは「余韻」



撮影した3年生、高橋桃夏さんに話  
を聞いた。

小学校5年生の時に祖母に買って  
もらったカメラで、いろいろな対象を撮影し  
てきたとのこと。

自然（風景）を撮ることが好きで、  
将来は自然環境問題を学びたいと、う  
れしそうに語ってくれた。

ところで、「この「余韻」は、どのよ  
うに撮ったの？」と尋ねると、「金沢の海岸で、  
ちょうど波が引いたときの砂浜を連写した  
ものの1枚です。」とのこと。

こんなことを尋ねてしまっただけで「余韻」に浸れないではないか、と後悔したが、お許し願いたい。  
一人一人の「余韻」に浸ってください。